《研究ノート》

「ドーデモ英和字彙」のローマ字表記と語彙

金　子　　弘

はじめに

『ドーデモ英和字彙』という本がある。書名自体がまじめなものではなく、内容も当時の俗語を英語風のローマ字見出しとし、もっともらしく日本語の語釈を付けた本である。簡単な解説が『大阪女子大学蔵日本英学資料解題』（大阪女子大学附属図書館編集、1962刊、項目執筆者：渡辺実）にある。そこでも指摘されている通り、日本語資料（特に語彙資料）としての価値は高いと言えないだろう。しかし、掲載されていた雑誌が、『驥尾団子』という、同じ団団社が発行した『団団珍聞』の姉妹雑誌であるということ。したがって、様々な資料が存在する明治時代において、一定の読者を獲得していて、当時の教養層が遊びやパロディとして表現を享受していた雑誌という点で資料的価値があると考えられる。

特に金子が興味を持つのは、当時の教養層にとってのローマ字表記という側面である。そこで本稿では、まず「ドーデモ英和字彙」のローマ字表記を取り上げ、次に俗語資料としての語彙面に言及しよう。

1 書誌

『ドーデモ英和字彙』は、明治18年10月、礫川喜望著として浮木堂から発行されたもので、本文16ページの冊子状の書籍である。序文にあるように、雑誌『驥尾団子』に掲載された後、冊子の形にまとめられたものである。金子が参照したのは、次のものである。

《雑誌》　『驥尾団子』復刻版（新井勝紘監修、2003年10月発行、柏書房）

《冊子》　国会図書館所蔵本のマイクロ複写

雑誌と冊子では、構成として次の４点の違いを指摘できる。

①題名が、雑誌では「ドーデモー英和字彙」（Ｅのみ「ドーデーモ英和字彙」とあるのは活字転倒による誤植か？）とあるのに、冊子では「ドーデモ英和

字彙」とカタカナ最後の長音符号が削られている。

②雑誌ではAからHまで順に掲載されたが、冊子はH・E・F・G・A・B・C・Dという順になっている。

③『ドーデモ英和字彙』では、ローマ字表記の上に横書きのカタカナで英語の「読み方」（と思われる）が付けられているが、雑誌掲載時でそうした形式になるのはC以降（ただし縦書き）であり、Aではローマ字表記の後、Bではローマ字表記の後に括弧でくくって示してある。

④雑誌に載せられていた語で、冊子では削除された語がある。（増えた語は無い）

①の原因は不明である。題名については、それ以外に、次のような違いがある。A－Dの項では角書きとして「明治新刻」が付いていて、D－Fには題名の後に「続編」と付けられていて、さらにD・Fは「ドウデモー」のようにドの長音が「ウ」で表記されている。つまりDは「明治新刻ドウデモー英和字彙続編」（原文縦書き）となっている。②については、綴じ方など、何らかの印刷工程でのミスということも考えられる。Hが1・2ページ、Eが3ページ目というように、ページの切れ目と項目の切れ目が一致しているので、その可能性はある。しかし、8頁目の途中でGが終わり、すぐにAの項目が続いているので、最初の版組からそういう並べ方をしていたと考えざるを得ない点もある。③については、雑誌掲載のC以降で表記法の方針が定まったためであろう。雑誌が縦書きで冊子が横書きという差は、本文の語釈でも同じであって、雑誌掲載時と冊子形態での差と言える。④についてはそれぞれの語の性格などを視野に入れて、3節で再考する。

雑誌掲載の年月日、号数、ページ、編者名を一覧として示すと次のようになる。

A　明治14年（1881）9月7日　149号,p.2405　礫川喜望

B　明治14年（1881）12月7日　162号,p.2614　礫川喜望先生之尻馬　松廼舎緑

C　明治15年（1882）4月12日　180号,p.2890（礫川喜望先生ノ尻馬）梅廼家

D　明治15年（1882）5月3日　183号,p.2938　梅廼家

E　明治15年（1882）6月14日　189号,p.3036　梅の家元園子

F　明治15年（1882）10月4日　205号,p.3289　礫川喜望

G　明治16年（1883）4月4日　230号,p.3690　楮鳴舎籟々子

H　明治16年（1883）5月26日『団団珍聞』340号,p.5119　編者　仙里庵竹

州・礫川喜望

『驥尾団子』は235号で廃刊となったので、最後のHは、姉妹紙の『団団珍聞』に掲載された。

2「ドーデモ英和字彙」のローマ字表記

もともとの語の掲載形態は、次のようなものである。

Aruken アルケン 車夫ヲ付ケ込アル ノ 厂

Ariy アリイ 藝妓纏頭ヲ貰フ

（以下の引用では、新漢字、横書きとする）

英語らしくローマ字で見出しを書いたということであって、体系的なローマ字表記を目指したものではない。いわゆるローマ字表記法には、当時起こっていた国字としてのローマ字運動を含め、正書法としての表記体系が背後にある。しかし、「ドーデモ英和字彙」のローマ字表記は、言語学の用語でいえば、「パロール」に相当する個別的な創造的営みといえ、体系性への指向を想定する必要がない。

したがって、ローマ字表記史（体系としての表記確立の歴史）の上からは、前後の影響関係を論ずるまでもない取るに足りない資料である。しかし、パロールとしてのローマ字表記の営み、また、当時のローマ字表記の受け取られ方という点から考えるならば、十分に検討の価値がある。なぜなら、そこに見られる表記形態は、現代のローマ字表記による行為と同じレベルのものではないかと考えられるからである。

現代の学校教育におけるローマ字表記は、日本式の表記法を第一とし、ヘボン式を認めるという訓令式の立場である。しかし、現実の表記行為においては、そうした規範が守られているとは言いがたい。例えば、プロ野球「北海道日本ハムファイターズ」の新庄剛選手のローマ字表記は、ＳＨＩＮＪＯとなっているが、阪神タイガース時代にはＳＨＩＮＪＹＯと「Ｙ」が挿入されていた。ジョをｊｙｏと綴る表記は、学校教育の現場でも教えられていない表記である。大学生を対象に授業で調査しても、ジョのローマ字表記は「ｊｏ、ｊｙｏ、ｚｙｏ」など多彩である。その表記の由来は、学校教育とは関係なく、英語学習による英語表記を下敷きとして、日本人が英語らしいローマ字表記と捉えて表記したもののように思われる。ｊｙｏなど、英語綴りでも一般的ではない表記が出るということは、英語表記そのものの影響と言うよりも、英語表記と日本語ローマ字表記の混合と考えるのが妥当である。

正式な規範としてのローマ字表記法ではなく、自由な表記意識を反映したものという観点で見るとき、『ドーデモ英和字彙』のローマ字表記を分析する価値も見えてくる。

さて、使われているローマ字表記と50音図との対応は次の表のようになる。

	ア段	イ段	ウ段	エ段	オ段
ア行	a	i　e	u	e	o
カ行	k a	k i	k u	k e	ko co coe
ガ行	g a	g i	g u	g e	g o
サ行	s a	s h i	s u s z	s e	s o
	c a	c i	*	c e	*
ザ行	z a	j i	z u	*	z o
タ行	t a	chi　t i	thu　tsz	t e	t o
ダ行	d a	*	dsu　dz	d e	d o
ナ行	n a	n i	n u	n e	n o
ハ行	h a	h i	f u	h e	h o
バ行	b a	b i	b u	b e	b o
パ行	p a	*	p u	p e	p o
マ行	m a	m i	*	m e	m o
ヤ行	y a	×	*	×	y o
ラ行	r a	r i	r u	r e	r o
	l a	*	l u	l e	l o
ワ行	w a	×	×	×	×

×は元々想定しなくてもよい表記（woについては可能性があるかもしれない）、＊は全体の分量が少ないために今回見られなかったと思われる表記である。「Akusekut　アクセクト」の「t　ト」のように音節末で母音の伴わないものは表から外してある。

全体の表記においては、サ行とラ行に広い２系列が見られる。サ行のcuとｃｏがシ・ソに当てられていないのは、単に表記量が少ないということではない。ｃｏはColonda（コロンダ　転んだ）やCowamesy（コワメシー　強飯）のようにコに相当しており、cuはCucintou（キウシントウ　急進党）やCuheyda（キユヘーダ　旧弊だ）のようにキュの音節を表すために用いられている。サ行とラ

行以外は個別の複数表記が見られる程度である。

全体としていわゆる「ヘボン式」の綴りであり、ｓｈｉ　ｃｈｉ　ji　tsu　fu などは英語綴りを反映させたものである。ｓｚ　ｄｚの表記と共に、ヘボンの『和英語林集成』初版の表記に列なるものと言えよう。ただし、イのｅ表記とcoeコ（Bondencoekボンデンコク）、ｔｉチ（Atetigayアテチガイ）はヘボン式ではない。イのｅ表記は、Ｅの項が一貫して元々はイで始まる単語であり（イケシャーシャ、イラナイなど）、英語の雰囲気をかもすために、意図的にＥ表記を取ったものと思われる。「Frueru　フルエル」ではエに当たっている。ｔｉは日本式であるが、英単語の綴りにもあるから、英語風のローマ字綴りの書き物としては許容されるであろう。ｃｏｅは英語的でなく、クの表記としてなら、オランダ語資料に見られる日本語表記である。ただし、Bondencoek（ボンデンコク）１例しか見られず、Bondencock　などckと綴るべきところを（Bicklyビツクリにｃｋのクの例がある）、校正で見逃したのかもしれない。雑誌の時と冊子にするときの２回とも見のがしたことになるが、他の例でもそうした例が見られる。

次に、特殊拍の表記問題を考えてみよう。

まず、長音である。ア段長音はCewaney（セワーネー　世話ーねー）のみであり、単音のaと区別がない。イ段長音は、Ariy（アリイ）、akaracy（バカラシイ）など、yを使う例があるが、ｙ自体はCraseney（クラセネイ）、Berammy（ベランメー　〈ママ〉）など、エ段長音でも用いられる。エ段長音をeで表した例はないので、ｙがイ段長音・エ段長音に相当する関係にある。なお、iで長音を表した例はなく、iは短音ｙは長音に当てられていることになる。オ段長音は、Dorobo（ドロボー）のように、短音のoと区別なく使われている例もあるが、Douraku（ドーラク）、Goutsuku（ゴウツク）のように、ｏｕで表記されている例もある。オ段長音をウで表すという仮名表記を反映した表記法が採用されていると言えよう。ウ段長音に関しては、直音のウは、Dzdzshy（ヅーヅシー　図々しい）のｄｚのように短音と区別しない例と、Funszu（フンスウ）のｓｚｕのように仮名表記の反映と思われる例が１例ずつ見られた。拗長音に関しては、Cucintou（キウシントウ）のｃｕ、Futotszcho（フトツチヨウ）のcho、Ekeshasha（イケシヤーシヤ）のｓｈａ、Hudoro（ヒユードロ）のｈｕ、またBiodo（ビヨウドウ）のｂｉｏのように、長音と短音の区別が無いように思われる。なお、ａｉの二重母音を表すのにｙを用いてByin（バイイン　売淫）とする例もある。Baidok（バイドク　梅毒）の例もあるので、常にyでaiを示すわけではない。

促音の表記は、子音を重ねるという現在普通に使われている表記法である。例、Assarit（アツサリト）、Bakkin（バツキン）、Botchari（ボツチヤリ）、Cappore（カツポレ）。しかし、Gatsukari（ガツカリ）のように促音表記のツをローマ字書きしたと思われる例が１例見られた。

仮名表記のローマ字書きという点では、拗音に関して、「Emkiyo　イムキヨ」「Hiyottoko　ヒヨツトコ」のｋｉｙｏ、hiyoのような例が見られた。また、「Giafun　ギヤフン」のように、ｉを半母音として挿入した拗音表記がある。

撥音については、仮名表記「ン」に対してｎ、「ム」に対してｍという対応が見られる。音声的にはｍと思われる「Denbo　デンボー」のンがｎ表記であるのに対して、ｎであると思われる「Emkiyo　イムキヨ、Emkin　イムキン」のｍに相当する仮名表記はムであるからである。

仮名表記の影響が少なからず認められるというのも、現代において営まれているローマ字表記と通じるものがある。現に書かれるローマ字表記は、学校教育などで教えられるような厳格な規則に則ったものではなく、いくつかの表記形式が混在している。現代のジョ表記に見られる複数性は、ローマ字による日本語表記には常につきまとっている問題ではないかと思われる。それは、ローマ字表記が、外国人への日本語教育（中世キリシタン資料のローマ字本を含む）を含めて「臨時的な」表記法であり、正書法（国字）としての表記法ではないことからくる統制力の弱さの反映であると考える。

３俗語資料としての掲載語

「ドーデモ英和字彙」は、当時の俗語資料としての価値もある。実際の用法から当時の意味用法を帰納するのが、語彙における意味研究の常道であろうが、そうした過程を経て得られる知識にも限界がある。使用回数が少ない語や一過性の用法などは、そうした分析で使用時の意味に到達することが難しい。ただし、『日本国語大辞典』（第二版）に採録されている語も多く、俗語の宝庫と言えるほど多くの特殊な語が掲載されているわけではない。

ABC各項の雑誌掲載時における語数を示すと次のようになる（括弧内に冊子体での語数を示す）。

A　24（17）	B　17（17）	C　19（19）	D　18（17）
E　17（17）	F　18（18）	G　21（20）	H　17（17）

合計151（142）

全体で９語が削除されている。その語は、

アンシンダ　アヲムイタ　アゴハヅス　アキガナイト　アクセクト　アレマ　アマリドヲヨク

ダンゴ　ガラクタである。

ダンゴとガラクタは、興味深い俗語の例でなく、自分の雑誌のことに言及している語なので削除されたと考えていいだろう（ダンゴの語釈は「一種ノ奇妙奇体列ノ珍聞（団々国ノ産ナリ）　米粉末ニテ製シタルクシザシノ附焚ノ食物」、ガラクタの語釈は「驥尾団子中一種ノ問答」となっている）。しかし、Aの7語はそうした意味の語ではなく、組み版で隙がないというわけでもないから、何らかの意図をもって削除されたと思われるが、その理由は不明である。複合語が目立つが、他の項でも複合語は見られるので、それが理由とも思われない。

全体151語のうち、『日本国語大辞典』（第二版）に掲載されている語は100語（66%）である。掲載されていない語は、アルケン、イラナイ、フラレルなど、活用語の非辞書形であるとか、アゴハズス（顎外す）、バンニクル（晩に来る）、フテーヤツ（太い奴）などの複合語、アカベイ（アカンベー）、ゲイプ（ゲップ）、イガクリ（毬栗）などの音訛を含む語形などである。

そうした語以外では、

アリイ　アフアフ　デンデンガデガ　ゲロリ　ゴメンサイ　ホクショ　ヒッテンテレツク

などの擬音語・擬態語やかけ声。また、

Agotta アゴッタ　魚ノ骨

Bakachan（ベカチヤン）吝嗇、人ヨリ依頼サル丶事ノアル時之ヲ仕振リニテ拒絶スルコト、娼妓ノ無心

Bilgero（ビリゲロ）　吐ヒタリ下シタリスルコト、流行病

Chokkamochi（チーツカモチ）窃盗、泥棒コソコソ、泥ツクトモ云フ

などの俗語や下品な言葉が見られる。俗語資料として一定の価値を持つ語例と言えるだろう。ベカチヤンは、ローマ字表記は「ばかちゃん」と読めるが、あかんべいをしている挿絵があるので、ベカコウ・ベカコなどとも言われるベカ（『日国』にも立項）に人物呼称で使われるチャンが付いたものであろう。動作ではなく吝嗇な人という語釈が当時の用法として興味深い。ただし、一般性がどこまであったのか、そう解釈することで面白さを出していただけではないかという懸念は残る。チョツカモチという語は、冊子でもローマ字表記が変わらないのでチョッカモチと認められる。『日国』に、こそ泥の意の「ちょっくらもち」と、ささいな様を言う「ちょっか」という語が掲載されているので、チョッカモチという

語形があったものと推定される。

なお、この辞典が1881－83年の用例であり、『日本国語大辞典』（第二版）の用例よりも初出年代が古い例がいくつか見られるので、列挙しておく。明治期の資料を一定程度調査すれば、辞典よりも早い初出例がいくつか見つかることは珍しくないので、それだけで「ドーデモ英和字彙」を貴重な日本語資料と言うわけにはいかないが、発見効率はいいかもしれない。（括弧の中が『日国』（第二版）の初出年代）。

Cucintou（キウシントウ）　廿三年ヲ待兼ル人　鯰ノ嫌ヒナルモノ（1900）

Furitin（フリチン）　赤裸（アカハダカ）、又褌（マタフンドシ）ヲ締（シ）メス（マ）、（金子注：締メヌか？）　（1951）

Giafun（ギャフン）　鼻ヲ衝ク冂、己レ独リ大天狗デ居ルヲ他ヨリ充分悪ク云ハレ一言モナキ冂（1902）

Hogokin（ホゴキン）　特別ニ官ヨリ下渡サル丶資金、御情ケ金、涙ケ金（1887）

Hojikuru（ホジクル）　綿密ニ探訪スル、聴糺ス　穿鑿スル（②の意味では1910）

国会開設を「廿三年」と呼んだり、官吏を「鯰」と呼ぶ（『日国』に指摘あり）など、当時の言語使用の実態が浮かび上がる語釈になっている。

以上、「ドーデモ英和字彙」のローマ字表記と語彙について略述した。明治語の資料をどう開発するのかは、明治語の実態を知るためには重要な課題である。本稿は、そうした資料開発の一環の意図もあって書いたものである。その中でも、特にこの資料への関心は、ローマ字表記のあり方にある。こうした資料以外に、一般人（ローマ字論者ではない人）のローマ字表記資料があれば、取り上げて考察してみたい。

（かねこ・ひろし、本学教授）